



里見八犬傳

第五輯

卷一

13
709
21



曲亭馬琴著

明治二十六年十月九日購

第五輯 第五輯

八犬傳

東京名山閣版

門へ遠 13
號 709
卷 21

名山閣

八犬傳第五輯序

曲亭馬琴

余常以謂有遊乎世者有為世所遊者遊乎世者適於自所適不適於人所適是以樂在內無竭也為世所遊者適於人所適不知自所適是以徵其樂於外以自苦焉若狂接輿遊于

歌詠莊周遊于寓言左思司馬相如
遊于文場杜甫李白遊于詩詞羅貫
笠翁遊于傳奇小說雖所遊不同而
其樂一致亦惡踏人之足跡哉蓋鸞
鳳不羣飛葛藤不獨立葛藤也者吾
欲拂之鸞鳳也者不可得而為友雖

然人世一夢中其所遊非華胥必尚
柯寤寐在我何遠之有能知是樂而
後遊者心之欲與不欲無往不樂遊
乎遊乎余固也久矣今茲端月本編
脫藁暨刷人告成即是言為序

文政五年陽月上澣

篔簹笠漁隱



南總里見八大傳第五輯目錄

自第四十一回至第五十回

壹卷

第四十一回

木下關妙真評依人
神宮渡信乃遭措平

第四十二回

撥夾前大田決進退
誣額藏奸黨逞殘毒

二卷

第四十三回

射羣豪傑開法場
涉義士俠輔投河水

第四十四回

雷電社頭四雋會語
白井郊外孤忠窺鱗

第四十五回

賣弄名刀道節復怨
追喪窮寇助友換敵

三卷

第四十六回

地藏堂莊助爭首級
山脚村音音拒舊夫

卷

第四十七回

莊助三試道節
雙玉交還其主



於まゝとせむ
おもむを叶せむ
旅ゆく君よあはれ
あらむ閑齋

單節の



十條尺八郎きつとふま

馬は背成りくくは
去りくくは
ゆきや驛路のす
くくは

曳手ひくて

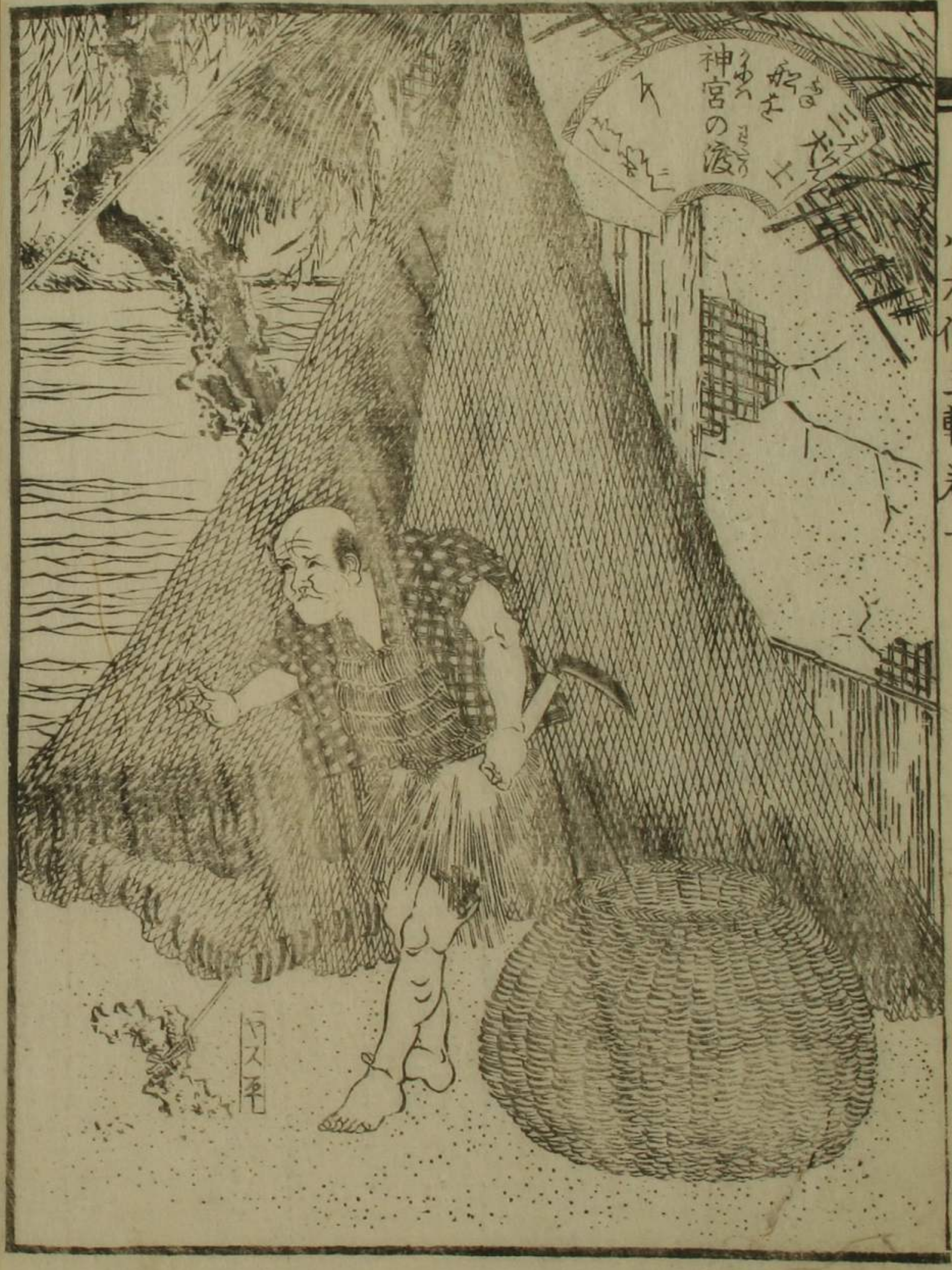
閑札

十條力二郎きつとふり



凡庸痴呆の童子は等しく野狐天狗は引かれて豈溝壑に死せぬや神慮と
 佛力九智と量知るにたうりぬ船九郎と屠戮して親兵衛を拯れハ
 役行者の志願ある歎介らば伏姫の神靈成神護ゆぞわんざらん彼姫うへ心
 雄々あり且孝あり信あり義ありその心術と行状ハ丈夫も多々ゆき終るまで
 為体と神遺言の趣と今ゆくゆく合されば骸ハ富山に瘞れて二十年ありぬ塚の
 標の松と肥後とも靈、必犬士のと人と護らせぬやわんざらん推量違ふハ他
 犬上と俱く此度彼小思ふとあつて人おく還り君の見泰入まんせし時の
 心を神慮と協せぬと且く隠しぬらんさげれ只是推量の當らぬと
 心も思わぬ今めく失ひ親兵衛は恙あぶ玉を握りて生ふべからば身は亦
 丹花の恋もいと事ハ孫の為は自愛して還らぬ日と俟也祖母外祖の愁歎ハ思
 愛の切なるも松の情を我ぬく只その二家のうへは係まり彼雅児を失ひて愁歎の

ハハハハハ君の為中を不忠は似たり友や不信に怨られん今この時の不忠
 惑めく夏の不如意は怒狂にれを腹と切らぬ死ぬ命と惜むわんざらん死
 こそ益かければ心と定めくまのあす小就く惑いと解ぬ世と憤る愚癡
 後の栄を俟むやと頻に諫將死せば文武兵衛ハ言下は悟りて亦共侶を慰むる
 妙真僅に涙を飲めく蜚崎ぬの白地は料らせぬ如く後戀しく信れども
 過世の業報あり子と孫と失ひて身も命も薄命ハ樹枝は離れ
 猿猴中も及ぶぬめとつて後の栄はあやわんざらんあ惜るぬ命かれども
 死れぬ罪障のいとも深故ぬれ吾儕ハ身の暇とある前か髪を剃
 捨て斗敷行脚の比丘尼と形は萬も親兵衛は環あふ日のありわんざらん
 素懐とほ遂げと旅あり旅あり野々の屍ハ獸を肥せとも罪障竟に消滅
 せば後の世とをわんざらん安房へまは要やといひて目を拭へ文武兵衛も



昔より久しき年中幾通とありあはし永獵あふ折る網船を貸進らせしも
 年来まなりやう只身と、昨今われども忘れもせむこの月の十六七日の比は
 身二個の仕夜と共に莊官は携われて漁獵は来ぬゆゑ折小人心當は莊官
 問みは彼は妻の甥や大塚信乃といふめこれハ里ある網乾左母二郎と
 ぬきぬきと報せせ久し定うま知らるる日ハ莊官の過失く船より涼港
 見身がとも精悍よく被あげひりあはし大塚の凶変ハ心苦しなす
 彼騒動を外中へ何地や適ぬいと真実も其け信乃ハ再び驚地く現ハ
 りればそのやうに殺生を好ぬ心よあはし多く之面忘れせし疎よ知ら
 ざりしゆ比伯母夫は俱せしてあはし遊び次の朝吾倚ハ下徳は赴登り
 送られて只今かへりあはし何れもあはし大塚の凶変ハ何あり所以
 候しと問へば稍平領はるる原米彼件の趣を露せりも知らず

告げな。あはし先立立く己が宿所は誘りたり三夫を目せ指し
 胸中の徳をかくて稍平ハ河原をせり白屋の門の戸を推開く遽く帯を
 把つ簀子の塵を掃片せし信乃現ハ小文吾を上座に請のり地炉は枯葦折
 焼く茶釜の層を拊試する心の火を吹信乃ハ頻は焦燥する茶も湯も
 欲く大塚の心のゆゑに彼凶変とハいつある故を再問れ小膝を進り人
 処へおぼく親く見らるるあはし風声隠れぬがさる隨の趣を物々り
 仕ん扱ひぬる十九日真夜中比のやあはし大塚の莊官夫婦ハ陣代兼二宮六
 属後軍水五倍二ぬい即死しぬゆゑ折莊官の小廝ある額藏とる猛
 着が遠方より帰あはし主の怨を報ひし宮六ぬハ當坐は撃れ五倍二
 浅痰才痰あはしと負あはし辛く逃さる縁故を尋るは彼陣代の威勢
 莊官の獨女を娶んとて約束せふれり先は息女の母河が左母二郎も約束

一と皆をせんといひしを猛に変改せられ左母二郎ハ多う怒とてその宵に稿小
 令弱を略奪て走りて圓塚山までおどりつゝ令弱濱路と申す所のらふ
 後々左母二郎を殺されぬと痛き泣きをかんよ折亦誰とも知らむ
 左母二郎を撃捕首を樹枝に伐梟つ云云と書送し只左母二郎のこ
 ち左母二郎加太郎井太郎かど鳴りて三個の破落戸をよおれ山路を殺し
 土太郎ハいぬ日は彼細船を漕し備高工で火バ犬塚ぬも識られぬ
 或ハ加太郎井太郎ハ旅轡を早められ左母二郎は備とて濱路と申す
 駕と申す土太郎ハその夜さう莊官ハ憑とて左母二郎を追蒐来て俱命を
 墮せしを就中傳へてくさむ心苦此額藏男の薄命を主の仇人を
 撃つもどし敵ハ特ハ威勢ハ陣代ハ属役との方さむ誣めなくも
 一切聴は背介と申す老僕と申すむと獄舎を繫れりり程は録舎

あり大石殿の下知を受る丁田町進との一個の老黨陣代と大塚下向の
 額藏背介を牽びて日毎の苛責問断す。とハ彼敵上の弟ハ社平といふ
 社平と五倍ニがわらう怒と復を安をう莊官夫婦の殺されハ婚姻の宵小
 令弱を細乾を奪去れと皆利の名刀が似も似つぬ質物ありと皆の
 媒妁も怒り狂り事起りて社平ハも五倍ニハ絶てハ蓋六
 夫婦を害せハ則ハ額藏之宮六と五倍ニとの折彼ハ邁あハ七夏の
 あよ置ること実りや誣り揚る真夜中ハあつた彼もは澄入
 中但背介と申す老僕ハ額藏ありとよく還りて莊官夫婦の撃つとて小
 浅瘡を負く倒れり。と額藏の證人と云云と安をわハ背介ハ口よく
 利のあぬ年ハ老り瘡を負り果敢くあつた彼もは澄入
 誣られ日毎の苛責を脱はれ。かれハ件の兩人ハあつた首を刎るべしと

いひて罵るものまかり可憎忠義の辻交を寛枉に殺されかばい憐れ死
 めんとし知れぬも彼舎弟と軍木を憎ぬめぬ悔いも胸苦し編る
 のもまかりん知れぬ人の子あひねと言葉をきくと死示さ信乃ハ現ハも
 小文吾も驚呆れて脊一嘆息をり多當下信乃ハ愀然る眉根をきり現ハと
 小文吾をええりくまが伯母夫婦の心ざぬも好もわれもあれ総角の比よりく
 養れる恩恵をいへハ哀感の涙禁め難くさるるも額藏への処を去らる
 主の仇人と撃つるよあ美し大義をさるるもいやく証られて命危死といふせん
 が同盟二人と薄命をぬりぬりぬり歎きりくと怨て臉をきりりハ両
 人も亦送恨の外背眺詰る春と捺りて慷慨嗟嘆ハ皆相同くさればと彼人を
 極む術も中俺們兩人彼処よりぬくも又里の風声とせ定めく後小をといふを
 猶平推禁めり各位ハ犬塚ぬも甚麼も由縁あつるもあねど漫や早りあひそ

そのひくくたつたを明々地ま告べ死致あちよ恃みとありともをきりり
 あり世の風聞は就くあは犬塚ぬもその初仕官の塔がひあび然るを
 陣代の密議よりく遠離られぬいと世の人ハわれ社平ぬ一五倍二のハ
 為婿くあひん腹心のぬは流言とて濱路を誘ひかせり又墓六が追捕
 蒐る左母二郎との餘の三人を圓塚山や殺せし信乃額藏が所為と喋々
 くいせし犬塚ぬも疑ひかりく往方を索らるるを大塚の里ハ大塚
 ぬも具負ぬもあされハ竊に胸を苦しゆる食ふ汗を握れども為よひく
 證のあされハ只舊里へ入りかせると念く口を鉗きたりと彼里入りのぞかし
 小入も大塚子聊相識るものあれハわれのあは粗使たりと誰しもと
 ませ犬塚ぬの友とて彼処へ邁りこれ彼と言問ひある捕りて辛死めあひ
 あんを危しとも危しとも首より密詰ハ現ハ小文吾ハいよく念激し堪る

彼日限りて社官の土太郎を備ひてと宣せしよりと之介のたのむる彼悪
 棍子ふ船を漕ぎて泥小入八年老と生活す懶惰なれば人のあはくせうと申す只
 兩個の猶子ありてを一個の名ハカ二郎一個ハ尺八と喚れり近江比治より来て細
 その目を送れり任侠剛毅の仕度あれば舊領主豊鳴殿の滅亡せうと歎か
 扇谷の管領家を以て忌憚る氣色なり況大塚の陣番かどハ屑ともあはれん
 彼少言を慎みて禍を取らぬとあわんとあへば小人教訓くあつく做らるれば
 余後ハ罵らひども志ハ今ハ攪混あり戸田へ捷徑あり彼ホは送らせしと
 蒲螺をとり揚ぐ吹鳴とんとする程ハ現ハ小文吾を禁めしむのく誠心ハ
 感さるよあまらあれども吾侪兩人ともくと送りてあまをまらり申斐は行侶ハ
 乏しがたのらるる人を増さばあつたは視まらべしとあつたはあつたは
 あつたは隨意あつたと応へ馳く蒲螺を舊の柱に掛らるる當下信乃ハ侍の

銀をわづらの母よりよさ寄る嚮中もあつたはとく願ふこれと納め更竊
 主人の志をその氣質を察しつる浮世をまろく衰望を避くこの水濱は隠れ
 の秋昔やういといハ福平願を相と否まふあつたはあつたは時いさげ
 武士の祿を食するのミ本姓ハ姨雪ハ舊名を世四郎とせり形ど下司を
 知れぬとわけて舊里にわかれこの外へ追退けられぬ小人ハ相識る老女去年より
 上野の荒井山の麓に在りと近属灰はまろく尚信濃路へ赴れぬと訪か宿を
 投り便もわづと豫てより一通を写りおぼえ又んや三やらのうと書かぬ
 のせんと眞実なれ身と起り相の隅ありと申す塵埃染る硯を吹て茶碗に残る
 茶を滴む墨ハ曲とて直に黄軸の巻筆技ぞとて眼鏡の玉匣めとせよあつたは
 毎日記の末の白紙引裂て走書して一通の状あり共ハ巻筆と飯桶の蓋蓋及揚
 撮りる飯粒とて封て標識を書きし大塚中是これと無礼のふりこれ

今釋世の中より大飼犬田と云れ某ハ総角あり彼人と義を結びて死
 生を俣ませんと誓へり況んが伯母夫婦の仇を立地は敷くを術計共々空しく
 勢ひ極ひぬる共侶は死んその他一すやくとあひ入る其を現ハ小文吾ぞあへむとの述
 懐ハ大塚ぬ和殿二個のうへのやん某ハ大川生まの面識かたも玉と痣とをか
 ちうせ既に異姓の兄弟之財を極くハ盤纏を竭して共計又智力を極く極み
 べくの死を共く相資人親疎を論むるところと辞等しく怨は信乃ハ党介とあて
 加頭の交りハめれ親疎あはれぬと某ハ就中故舊の微意を演るるの腹を
 あひかひと両友あつちを勸め幸ひ尤甚一あれども大田ぬ假初は送り来り逗留
 あれ地よ日を祈ハ親を忘るめは似う和殿ハ船を乗えしと行徳と市川へれのの
 よと報更さるばれ彼人の待まひくをも物をもん還りあしと可憐は論せ小文吾
 頭を掉く某も親の目をあぶらまわらねども彼人ハ既ハ無さるやとあまハ火急の

難義あり舊里入り待れいと立入りて来ハ竟その期は合せて撒射を
 枯魚の市はん豈をとも義とせんや且大塚の城中へ親く交加るとかハ何と便着ハ
 大川生を極ひれとをぬん大塚ぬハ勿論ハ大飼ぬハ許我殿よりその沙汰彼人へ
 せえ一鉄これも亦知るべし城中の為体は日毎は窺知る死の某ハ誰ぞん
 是れ今来一途の田の畦わくこの鉄を拾わり鉄を進む物をも助れども退くとた
 その功を剪ハ鉄の本字ぬと鎧櫃ハ前の字とも又剪の字を書き前後を
 ころハとんこの義を取らると某総角ハ比良迹の師方人のひハ鉄鎌
 整むどの農具ハ田の畦を透てもあはあえき処ハ成てこの鉄を拾ひハ
 前ハ仇を前カるとハ十字占ぬんとあひハ歡びくとり揚り然る今ハ徳
 退くとたハ鉄の功ハ事既ハ奇異ハあはあえきハ思惟ハ某ハ縁を求めて彼
 城中ハ入るとも高買を打扮ハ忽地ハ怪人考るるこの額髪ハ

多かる郷導の為死に宵ハ某犬飼を招く潜るふ邁てん三人共信也
 及ぶ一人も若密堂は通夜せし法師們は怪しん且神仏を欺くは似くふ
 愉い死が今宵ハ大田魚り也犬飼生を先ははるは実父の墓彼処よりを
 らを償せん為の愚意は後ひめんやとて兩人領たての議定はあふべし
 とくくと急し寺僧も若密堂は通夜はせし外はわれ既わく日ハ暮
 りる程は信乃現ハ辨天堂を潜出く足は信くと急ぐ程は宵闇に人む
 遭び滝野川より大塚まで道二十町は過ざればもくも莊官墓六が宿所の
 ほろよあくるは門の竹の柵をけり裡面ハ人影ありともおぼえ今ゆよ
 浅くして嘆息し退るべき前向る綱乾が宿所を外のかきまりし眼くふ
 現ある空房はかりこの処は初棟助の宿所なりと信乃が告る現ハを
 懐舊の涙を禁め家ハむくの終となくは親の面影ハ夢さてもんるす

知れど時るはあはれなれば信乃ハ現ハが袂をく親の墓所を参
 詣を祖母と番作は東の墓ハ果ハが齊祝ハん水ハ個れは控もあたり又
 十歩むる左のうま近樹葬とんとおのり墳堂兩基並びりみむ墓六と
 龜藤亡骸を瘞ありあハ絶く控も信乃はうりくえくを徳の厚
 薄ハ死後ハ必ん死にあり親と伯母との用しとあす就くおのり錦を被て夜故
 郷へ歸るは諺も劣らあが不肖り許を史とふひら二親の墓祖母の
 墓彼新した墳堂も水を沃死莽草を挿く曲々祈念を擬せば現ハも後
 方は跪けり念する回向は夏の夜更初りかくて又信乃ハ現ハは償して棟助が
 墓所は赴くこの夫婦の墓も控もまばと棟助が身おる比信乃が墓六
 とは勤めく香華料を寄せし其の菩提院より植る現ハ信乃が恩信は感
 涙を拭ひあへむ水を汲りけ控を自向く追慕の良をゆりもか地上は平伏し

慟哭○とほろて時の移るをあらがり多し信乃も有數系は懷舊の涙を汰とだ、俱とも
 祭○おほるは田舎の墓所八寺内○おほはあつてまよく田の畦○おほはあつてまよかるといふも自在○おほ
 小夜更○おほえれば寺○おほの詣○おほむ信乃ハ又先○おほに立○おほて額藏○おほが母の堂域行婦塚○おほを去○おほ
 現○おほへと共に祭○おほれりその子の為○おほは災害消除○おほをあらは○おほす占○おほく禱○おほるがごとく文現○おほハ
 甲夜○おほの間○おほは墓六○おほが下件○おほの風声○おほを彼此○おほまてうちあつて○おほは○おほ平○おほが告○おほぐるては
 精細○おほあふ及○おほひも言○おほ大○おほく異○おほあつては○おほ程○おほは○おほ廿四○おほ日の月高○おほく
 并○おほりて丑○おほ三○おほかんと多○おほ比行婦塚○おほを祭果○おほて信乃ハ現○おほハ共○おほ侶○おほよその曉○おほくこ
 滝野川○おほある岩窟堂○おほをく○おほけり小文吾○おほハ信乃現○おほハ妻○おほの趣○おほをう○おほち○おほ然○おほるハ
 翌○おほハれぬとて竊○おほ示○おほ合○おほひ○おほ程○おほは天○おほハ明○おほく朝鳥○おほの啼声○おほは寺○おほ老○おほ早飯○おほを果○おほは
 やぐ○おほく小文吾○おほハ亦現○おほハを償○おほひ○おほく大塚○おほを赴○おほく途○おほゆる農家○おほ老○おほ王○おほ子○おほ権現○おほへ獻○おほする
 竹鎗○おほと弓○おほ箭○おほを賣○おほるあり又麻○おほと木縣○おほを織○おほるありを○おほ小文吾○おほハこの処○おほわ○おほく麻○おほと

木縣○おほを十四五○おほ交○おほと芳○おほ苑○おほと祇○おほと買○おほとりて信濃路○おほむありの○おほ商○おほ旅○おほ小打○おほ
 現○おほハ先○おほに立○おほて大塚○おほを赴○おほけり現○おほハ並○おほあつてとてあ○おほぬ人○おほやも○おほの○おほ潜○おほりて言○おほ
 ぶ○おほ死○おほ家○おほも○おほぬ○おほが○おほあ○おほの日○おほも亦行婦塚○おほ番作夫婦○おほの墓○おほ権助○おほの墓○おほ詣○おほく小文吾○おほ共○おほ
 これと祭○おほするがとも同盟○おほの義○おほとあり親○おほの如○おほく子の如○おほく祭果○おほて現○おほハ親○おほの菩提○おほ
 院○おほを赴○おほけり住持○おほは對面○おほあつて権助○おほが舊日○おほ果入○おほりて告○おほて布施○おほをせり程○おほ
 小文吾○おほハ女○おほ関○おほは○おほ現○おほハ住持○おほと雜談○おほする序○おほは墓六○おほの趣○おほを○おほ
 墓六○おほハ宮○おほ六○おほを○おほ敷○おほし魚○おほ藤○おほハ五倍○おほニ○おほ殺○おほれし○おほ又額藏○おほが○おほ同○おほめ○おほハ城中○おほの沙○おほ
 汰○おほハよ○おほくも○おほあ○おほつ○おほ當○おほ下○おほ現○おほハ膝○おほを○おほ進○おほめ○おほ某○おほ同○おほ初○おほの商賈○おほあり大塚○おほの城中○おほへ出入○おほせん
 工○おほと願○おほへり○おほ紹介○おほを許○おほしあ○おほつ○おほた○おほ幸○おほひ○おほありて地○おほの○おほも○おほあ○おほく請求○おほと住持○おほハ
 布施○おほの○おほ妻○おほは○おほ愛○おほく○おほ疑○おほむ○おほ氣色○おほも○おほく大塚○おほの城中○おほや○おほ些○おほの檀越○おほあり○おほは○おほ折○おほ
 ち○おほハち○おほの○おほ好財主○おほも○おほあり○おほわ○おほす○おほさ○おほい○おほその入○おほは對面○おほせん○おほ小文吾○おほを○おほ召○おほす○おほ

成るふ似たり。總麻の服なりとて。その怨も祭るまわりの神免をせざる欲
いどや彼瀑布を被襖して同盟大川生の為は窮院解除の眞福を禱ふ。さいとく
存一衣を脱く。あゝ瀑布を身を搏し。當山岩窟辨才天并は俺の不動明王若王子
権現と念して丹精を疑。追前酌再説。殿上宮六が弟殿上社平八の六月二十
日の朝属役卒川菴と共は搦捕する額藏背介を緊しく獄舎に繫し。腹心の
歩卒西人の訴状一通を齎して鎌倉へ遣はし。往返一晝夜を限り。その宵初更の
比及は符も鎌倉へ送さる。さればその告訴の趣に額藏を誣て信乃を疑ひ。莊官
墓六夫婦を殺り。宮六を殺して五倍二を負せし。墓六が小厮額藏が所為
と老僕背介とのを。これを資け墓六が妻の甥大塚信乃との。亦との惡
與れり。但信乃は逐電して。その往方と。これより先。その夜。墓六が
女兒濱路を盗出せし。追捕のめも四人。圓塚山を殘害して。云と書送せし。信乃

額藏が所為あり。風聞既定。之より額藏背介が當朝は搦捕て既
その身と禁獄せり。異くハ額藏も多あり。兄の怨と雪んと欲し。仰る。濱路あり
状訴仍く件の如誠惶誠恐と書き。なる。是中より大塚の城主大石兵衛尉が鎌倉の
郎中ハ老黨を聚合て。食残り。これ被と擇はし。出頭人丁田町進を陣代として。大
塚へ遣はし。と定め。内。その情偽を拷糾して。社平菴八が訴の趣。のり。あ
実。六刑罰ハ律の隨は執行せしめ。と猛。命。これ。所進。次の日の曉。鎌
倉。とう。起。頻。馬。早。六。十六里。四時。の程。大塚の城。乘。著。社平
菴。八。對。面。主。命。を。述。傳。へ。て。五。倍。二。が。刀。倉。を。檢。る。眉。の上。僅。一。个。所。淺
瘦。れ。物。の。ひ。ま。生。平。より。爽。あり。事。の。趣。と。述。ふ。五。倍。二。答。て。某。ハ。路
十九日。宮。六。俱。せ。し。品。草。濱。は。赴。り。か。る。さ。更。圍。り。新。張。燈。の。蠟。燭。の
と。之。く。かり。六。を。墓。六。借。人。為。且。湯。を。乞。ふ。と。渠。が。宿。所。立。あり。一。小。彼

小廝額藏が主の夫婦を砍仆して逃去んとしつづつ撞見し不意を敷いて宮を
 若黨二人ハ矢庭に命を預けり某えふが趣舎送恨は堪はれど実たやうふ
 陳一り町進らむ受く既まのどくわが事忽ちあつてとこの曠昏より廳に
 開け六段兵ホ額藏背介を獄舎より亭午して縁類わうく推居り當下町進を
 やとれ額藏と呼けり事の顛末を鞫問する右は菴八あり左は社平あり燈燭
 見起り亭午のどく明らるる殺兵八索と牽獄卒杖を揚ぐとく事の趣を
 上も責るけるがれども額藏ハ騒だる氣色もなく主の仇人の道しかくて當坐
 敷の苗ゆへにとの趣ハ曩日すえあびる如し別は仔細もいふとバ町進を
 斬立せし額藏汝ハ信乃と謀し合して主の女兒を盗せしを青圓塚山の
 洞より追捕のめども砍仆しと筆者無名の書を送せし人を欺んと欲され
 奸計かん風声既定なりかともあるとの怒を飽くを主の宿所より立入りて

錢財衣裳を盗んるは莊官夫婦を殺せ折邁ありし宮を若黨二人を
 残害して刺痕を負し五倍二が命恙あられの口状と風聞と符節を令て
 分明ありは外は誰とさして今ゆ主の仇人といふや嗚呼の癖者を罵れが
 額藏堪はれ小藤を進めてを憚あそわれども宣ふ趣ありとほき某をその
 前日主の使とてけりて下統あかへりとの縁故を定むねを主人夫婦の殺れ
 してその通は死あられを兼上殿と敷苗れども相輩は抑留せられ軍木殿と
 擊漏せし元送恨の至り況彼式塚生その前日故ありて下統へ赴たりを傍輩
 奴婢を召て向せぬが分明かん又莊官の女兒濱路と豪奪して走りハ浪人
 綱乾左母三郎あり且濱路を殺せし左母三郎が所為あり建方牌は記し
 わるこれも亦分明あり軍木殿はその身の羞と掩ん為し誣ゆを某ありし
 己前は主の撃もと認めしハ則この背介を五倍二殿は小髪を砍られて貫子の



大傳五郎卷一

世三
山崎屋



大傳五郎卷一

山崎屋

背介を獄舎まかへ遣せしは背介ハその曉々も終むをわくかりたり。あはれも額藏
弱り方氣色もかく罪は伏せくもわねぬ。社平五倍二ハ氣を悶々町進ハ密書を
遣し物夥賄賂と媚諛むとをかくその断獄を急ぎ町進亦利の為ハ
傾地を死小入れば竊ハ社平五倍二を慰めて背介ハ脆く死しれども其の既
首伏せれば第一の案驗之某亦復處分あれば額藏を向落走し縦彼
奴ハ首伏せども背介が首伏せども證據とせば刑罰ハ障りや今志づらく俟
久とあびやまは回報し腹心の夥兵西三人を圓塚山へ遣して左母二郎がうを
記せ枝樹の幹を伐りてこれを果て云云の教十字ありあり又額藏を
獄舎より牽ききて筆と紙をさしつけられ聊やあり左母二郎と書は濱路と写し
天罰仍件の如く六月十九日の宵と書べしとくといふて右の傳を後しなれば
額藏ハ勢ひ推辭へくもわねぬ。隨書てうらまの町進ハ額藏を初り持

緊しく縛さして彼伐りて幹の文字とこれ彼を合して見ゆ。然る声高きふやれ
癖者これを知りて圓塚山の樹と推削りてこれハ是惡黨烟乾左母二或秘藏の
大刀と掠ぐ又處女濱路と拐掣しとの後と怒るや子烈女を残賊せる天罰仍て
件の如く六月十九日の宵子の初点と識せし幹伐りてあまやう汝が跡と合しんふ
同筆物と疑ひやれ信乃と謀し命と濱路と盜せしも又左母二郎亦四個の連
人を殺して世の猜疑と掩へる云云と書送せしもみかほ汝が所為をう世の風波と
咄合せり彼処ハ濱路が死骸をれが左母二郎を殺さしや信乃ハ濱路をめて走し
る偽書ハ汝が作意之この一條をも推し墓六夫婦を殺せしハ宮六五倍二ありと
汝が奸詐頭然り天罰仍の如くと書しこれの自識とわがむと敦園悍く
詰れども額藏ハ世も擬議せしその宵のうら云云といハ解んとほ程ハ町進ハのく
嘆く兵共彼奴が骨を掠ぐ首伏せよと焦燥ハ獄卒ハ阿と志く額藏を

二八 傳五 目 卷 一
廿四

欽木の上は推仰向括著て目ももろく洗死被る水ハ垂氷の凍解を雷よりも
 倒し推立つ水と吐くはるは且して甦生せりこれありて西三日町進ハ術をかえ
 おもく苛責を重くせられども額藏ハ初のどく王の仇人と敷りしもの苦痛を
 忍びて遂に屈せ給へり氣絶せられども獄舎に入れば恙なく故あるは額藏ハ
 一夜天山道節が肩の瘤を碎てまよま令し忠の字の玉のこの時老も牙をかき
 ころはるも玉は換方物とあま丸或は頭髻の中は菴おたりある時ハ玉は隠し又
 口の中は含てをりさ程は杖撲れ或は永と沃種之苛責は筋骨痛く心地死せう見
 たる件は玉と口含をこれとて身と附れ苦痛立地は除去り心地清々あくるは
 かつた杖瘡ハ一夕は瘡くとの痕もあくなりや町進ホ玉の奇特と露むるも知
 たりハ竊に怪しめり額藏ハ苛責は挽き杖瘡を忽地愈はるは法術あり

中へ渠ハ莊官の小廝は似けぬ殿の人を殺せしむも故あはれなり術を
 ねえんハ殿の隨は責きて脱去りてあはれん殺すはあはれと吐裏尋思
 して遂は使者を鎌倉へ遣て王の天石兵衛尉は獄獄の趣と訟るは背介が首伏云云
 あり圓塚山を人殺せし額藏と信乃が所為ありハ云云の淺よりて頭は方ハ
 あり額藏ハ既り陳いし辞あり莊官墓六夫婦を害して牙の罪を脱とんるは
 還る宮六五倍二と王の雙言ありと証る事と曲は首伏せりさげれ背介ハ累日は獄
 舎の身あり信乃ハ許我へ走りしその中えこれあはれども鄰国敵地のうはれ
 追捕の殘り及ぶは但額藏ハ苛責を肩とせは幻術邪法を修するは彼打々
 怪なり更り速に誅戮せしハ非常のみもあはれと忠義と証る奸邪と資け
 卷八と連署して実吏一は報るるかて七月朔日よその使者鎌倉より歸り来り
 まる町進ハ卷八と共主の下知状を披見するは墓六夫婦を殺せしハ小廝額藏ありん

○まてごきやうりせしむる○ありけのちりかきか
 六既五逆の罪人之當り竹鎗の刑罰は行ふべしかれが敷上社平亦が復讐の義を
 協ねどもさしも兄の讐を法場は臨て獄卒は立代り額藏は鎗を鍋へと頭を
 とハ隨意のべし額藏が鼻悪加ふる邪術あるは是九庸の罪人をたてし
 非常と敬めよと下知せられうなれが町進ハ欣然々て駭て社平五倍二の主命を復
 つ明日未の比及は庚申塚のほとりゆく刑戮を初人宜準備ありと懇せと死
 示れこの時五倍二が眉間の痣を如過半愈へる兩人雀躍しく主恩を拜謝し町進が
 計後と徳として且歡ひ且勇む意氣揚々と合咲く免許の復讐言はげしむ
 彼奴が腋肚刺串が鼻を雪るは足れり誅戮の美を任され武運は稱せし言
 兼して退せし鳴呼奸黨の残毒ある且く天子捷りの致畢竟額藏が
 性命奈何がやとを次の巻に解分るといふこと知るん

里見八犬傳第五輯卷之一終

